

アラウンド GOGO 55 病に学ぶ

射場
隆



今年の1月2日の夕方、食欲がなくてお腹の痛みがひどくなり腸風邪と思つて病院の休日診療に行つてみたら、CTなど様々な検査の結果、腸間膜が圧迫されたり、ねじれたりする絞扼性イレウス(腸閉塞)の診断で緊急手術を受けました。鼻から胃や腸まで管を入れ、胃や腸の内容物を

体の外に汲み上げて、3時間の開腹手術でした。日頃、歯科ぐらいしか縁がなかったのですが、今回の入院からは多くのことを学びました。

まず一つ目は、病気になる時の不自由さ。点滴・鼻からの管・尿道カテーテル・脊髄に麻酔を入れる管と4本の管がついた状態から、一つひとつ管がとれていく時のありがたみを感じました。

二つ目には、食事のとれる

ことのありがたみ。絶飲食が数日続き、お粥が最初出たときは食欲がなくて食べるのが苦痛でした。食事の内容や量が制限されますが、美味しく食べられるようになった時は、本当に嬉しかったです。

三つ目は、無茶をしてはいけないということ。発症の原因の中で大きかったのは、食べ過ぎ。辺野古の現状を見たいと家族で沖縄旅行を年末にして、おいしいものをたっぷり食べ、その上に年始にも…で、限度を越していました。

四つ目は薬の副作用のこわさ。2年半前から飲んでいた薬が、腸閉塞を併発することがあると病院で知らされ驚きました。

五つ目は、周りの人から支えられることの意味。病休をとつたら自分のしている仕事

で他の人の負担になると、復帰を焦つて再入院してしまつたのですが、周りの人たちの大きな力を感じました。手が不自由になれば足が大きな働きをするように、カバールをしようと思う時に大きな力を發揮するものです。自分は動けないけれども、「ありがとう」を伝えていくことが、お互いの信頼を高めることになつたと感じました。障害を受けた人を中心に家族や周りの集団がまとまっていくことに似ているようにも思いました。

2月半ばに復帰して、定年退職まであと3年。8月の京都大会では多くの方と共に元気に学び合いたいという思いが高まっています。ぜひ、京都にお越しください。

(京都 特別支援学校教員)